

## 英雄主義への弁明

— 信仰を求める随筆 —

その3

ムルク・ラージ・アーナンド\*

小西真弓 訳

### X

第二次世界大戦期に、多数の作家や芸術家が動揺していたのは、彼らの多くが、人として社会的・政治的に覚醒しているという認識があったにもかかわらず、現代社会における芸術家の正確な機能を定義できなかったという事実によるものであろう。

例えば、小説のような芸術作品は、社会的状況の報道記事であると信じる愚か者もあった。その一方、自分の万華鏡のような心理状態、とりわけ潜在意識や夢、あるいは病床の体験を描けば、技術的には十分であると信じる、主観論主義者もいた。そして勿論、他にも我々のありふれた文明社会に住む退屈したご婦人や紳士に、くつろぎや逃避を提供しようと執筆する文学に身売りした女性作家や、のんびりした芸術家など、沢山の人が常に存在した。彼らは皆、お互いに言葉を交わしていた。

しかし本当の問題は、これらの平凡で幾分なりとも天真爛漫な人々の間にはなかった。その問題は、一般的に芸術は生活に影響されても、本質的にはより独立した自給自足の、外的な力よりも自らの内的な論理によって推進されるものであると信じる形式主義者あるいは審美主義者の間に、また今日の芸術家は全世界を包括する複合体の中であって、物事の根源に到達したり、深く掘り下げて、自分たちの置かれた場所や環境、年代に合った洞察力を認めたりする場合のみ、創造できると信じる写実主義者の間に存在した。形式主義者や審美主義者の言説は、少数のとても敏感で教養のある人々が数少ない同類の人々と意志疎通ができ、生活の心配、あるいは大衆の低俗さに染まることなく、できるだけ純粋な瞑想をすることができる全くの主観主義に到達する。写実主義者は、実践するというよりも大方は実験的でより効果的に唱道するだけだが、「社会的現実主義」という食欲をそそらない名前で呼ばれる、共感性においてはより広汎で寛容である利点を有している。

私には、大西洋の両側で作家たちが何年も巻き起こしている論争の本質を論じているスペースがない。写実主義を信奉しているものの、私は前述したとおり、詩的な写実主義を好む。例えば、私は執筆するにあたり、欲望のイメージ、あるいはロマンチックな願望の重要性を強調

---

\* 本抄訳は、Mulk Raj Anand, *Apology for Heroism: An Essay in Search of Faith* (London: Lindsay Drummond, 1946) の第10章から第11章(最終章)を翻訳したものである。

したい。そして、私は文芸写真に対抗する芸術を全面的に支援する。私は、今のところヨーロッパで分裂している価値の統合を強調したように、新たな種類の革新的人間が立ち上がるために、人間全体を眺め、経験について真に人間らしい見解をもつのを願ったと同様に、正真正銘の人文主義的な芸術の必要性が、我々の時代の要求に合うものであると強調する傾向にあった。

社会において作家が常に果たしてきた役割の大部分は、その気質と不可分である。例えば芸術家は過去のあらゆる社会において、他の人々が自分自身の観察力を確認し高めることによって覚醒するように、その新奇で独創的な人生観を他の人々に伝えようと努めてきた。現在と未来の社会すべてにおいても、芸術家は同様に努力するであろう。そして芸術家は、一人の人間の心を別の人間に解説する者として立ち上がり、人間性の多様性の中にある統一性を明らかにする特異な才覚によって、一人の人間ともう一人の人間の間、そして国家間の真の共感の絆、実際に別の階層を理解しようとする、あらゆる階層に属する純粋な人々の間に絆を創造するだろう。

しかし現代世界の思いがけない出来事の中で芸術家は、私が思うには、達成すべきより偉大な役割さえ担っている。物事と人々の真の新奇さや個性を感知する才能、あらゆるもの、それが花の美しさ、音楽モードのリズム、幼子の気まぐれと同様な人々の嫉妬の感情であろうと、何でも理解し把握する持ち前の能力によって、作家は正確に現世全体を取り込む。そして道徳家が行為について強調したり、科学者あるいは哲学者があらゆる経験について近視眼的な見方をする一方で、作家は人間的な魅力を犠牲にしたり骨抜きにすることなく、世界の様々な局面を見たり、合理的であるか非合理的であるかを問わず、徹底的に人々や物事に関与する。それ故、作家はよりバランスの取れた人生の展望に到達し、人間の発展の頂点に到達した全き人間であろうとする特異な存在となる。そしてどれほど、この種の人間らしさや心、頭脳、想像力、行為を実現しようと試みても結局、作家はよろず屋であり、支配者にはなれないことが推察できる。しかし、私はそれが正にシェリーが詩人のことを人類の無視されている立法者と呼んだ時に、その心中にあったものであると確信している。なぜなら詩人のみが誠実で勇敢でさえあれば、認識力と意欲ばかりでなく審美的に高いレベルで、世界を質的に理解したり、人間の感性のもっとも繊細な過程をも感知したりする立場にあるからである。そして真の創造的能力があれば作家はその知識を、人々に人間の義務を故郷と国境を越えた場で主張し、普遍的な人生に関する覚醒を促すほどの先見の明に変化させることができる。そうなれば、人々に人生を蘇生させ変化させる意欲をもたせることになる。

私は芸術のこの画期的な局面を強調したい。私が意味するのは、芸術が人生を変化させる道であるということだ。資本主義社会の発展の間に始まった詩人の孤独な年代を通して、審美的な態度は学者によって本質的に瞑想的で私欲がなく、非実践的であると一般的に考えられてきた。なるほど、それはジェームズ・ジョイスやD.H. ロレンスの例のように、もしある本の愛を語る一節が読者の情熱的な欲望を喚起するなら、それは図書館の書棚から除去されるべきであると考えられてきた。また、もし美味しそうな食べ物を描いた色彩豊かな絵によって、我々が唾液を出すなら、美を鑑賞する喜びは台無しにされるとも思われてきた。歓楽を求める態度への反動である、この種の清教徒的なタブーは、抽象的な美の理想を人生から完全に切り離す装置となる。しかし、我々は『ニュー・ステイツマン・アンド・ネイション』(the New Statesman and Nation) のような新聞雑誌に「あなたの人生に最も影響を与えた書物は何ですか」

というアンケートを掲載するだけで十分である。そうすれば、ラルフ・ウォルドー・トラインの『無限生活』(*In Tune with the Infinite*)、あるいはラスキンの『この最後の者にも』(*Unto this Last*)、『アंकルトムの小屋』等々が人々を鼓舞する影響力もつことを伝える、かなり正直な解答が我々に何百も寄せられる。それ故、芸術作品の鑑賞は、単なる無欲な瞑想でないことは明らかである。もつとも、芸術と人生との関係は、新聞の喧伝と人生との関係ほど直接的ではない。その種の関連は、ある紳士が一冊の辞書が頭に落ちて頭蓋骨がへこんだと宣言する影響力と同様なのだ。また、それは単なる肉体的幸福と美味しい食べ物との関係とも違う。そのように議論すれば、芸術と人生の両方を全く機械的に見ることになるだろう。一方、もつとも超然としていて感じて、誰かに影響を及ぼすことを少しも求めない作家さえ認めるように、両者には一つの純粹で重要な関連がある。ジュルダン氏(Monsieur Jourdain <モリエールの『町人貴族』に登場する人物>)のように、「それとは知らずに散文を語り」、少しも切り崩せないにしても確実に小さな氷を溶かしている。

しかし、芸術作品が創作される時に、実際には何が起きるのだろうか。表向きには、芸術家は経験から理解したものの総てから重要な要素を独創的に抽出し、それを心の中で欲するままに特定の色付けで変化させて表現する。それ故、芸術作品は芸術家の精神の中で自らの経験を投影した結晶である限り、基本的には改良を加えられただけで、人生に関連したものである。あるいは、むしろ芸術作品は、他人の経験により深く立ち入り、まとめて人生を変えてしまうほど、「創造的神話」によって強烈なものにされている。

芸術家は、どのようにして自分の攻撃的を選び取るのかを知っているのも、また新たな視点から物事を見ることによって、どのように現実の核心を貫くのかを理解しているのも、(その視点からは、実際に最も包括的なビジョンが得られることになるが)、一つの芸術作品を作り上げることができる。この芸術作品が、どれほど我々自身の実際の洞察力を本物だと証明するか、我々がそれにどれほど感情や心理、情熱を注ぎ込み、その共感を共有できるかが、芸術としてのその作品の偉大さを測るものである。そのような作品の意義は、新しい神話に基づいているが、それが真摯な人生の展望についての高尚なコミュニケーションに依存しているのも、画期的である。ただ、生きた神話と滅亡した神話があり、革命的なロマン主義の土台である欲望のイメージは、真に創造的な逃避のための処方箋というよりも、社会の中で人々が融和するために役立てられなければならない。詩は一種の勇気でなくてはならない。

もし我々の時代に、この社会における芸術の役割に関する理念が、人々の実際の要求にかなうなら、芸術家は本当の意味で革命的になる。そのとき、芸術家は現実の極みを感知し、新たな人生への道を示すことができると同様、現在の大混乱から未来の社会を再建する仕事に直面するすべての男女の背後に存在する刺激的な力として立ち上がる。

これは単なる常套句ではなく、その含蓄が適切に理解されなくてはならない意見である。なぜなら、資本主義は私的財産を土台にし、利潤や国家間の権益争奪のために労働を搾取するので、それに内在する危機をファシズムや戦争以外に解決する方法がなく、それ自体が全く安定したものになり得ないことは明らかである。にもかかわらず、世界の広い地域の精神性に影響する資本主義のシステムの支配力とそれに纏わる観念と制度は、未だに続いている。そのため、「民主主義」という言葉が、資本主義への反動が欠如していることを取り繕うために詐欺的に使われている。

したがって、現代世界で最初に実践されるべきことの一つは、人々を教育し、すべての人々が自由に過去を探求して幅広い知識を集積することである。そうすれば、人は自由の本当の敵に対して警戒し、人間の生活の基本的な道義を認識できる。

作家は真実にのめり込むため、自然科学者や教育家よりも、遥かに永続的に人間性を教えるのに役立つ。なぜなら、私が以前に強調したように、創造的な作家あるいは詩人は言葉を歪める者たちを暴露して真実を求めたり、世界を広範囲に眺めたり集約的に見たりするからである。そして彼らは、人々を尊厳の高みへ高揚させ、目の前の任務に取り組ませるのに不可欠な精神性を備えさせる器具を有している。人々に内奥の願望のはけ口を与え、その本質を露わにし、彼らの意志を固めさせることによって、作家は人々が新たな社会が出現するための反逆のドラマに参加させるのに役立つ。また作家は、自分の行為の是非を必ずしも、他人が外から押しつける専制的な行動規範によって判断せず、専制君主ではなく自らの啓蒙化された意志だけに従い、自分自身の内面の良心をチェックする、よりレベルの高い人間を養成する。

このように、革命的作家は個人の発展ばかりではなく、芸術家仲間と連携して、人類の歴史を現在の原始的な闘争から、真の文化的発展を意味するより複雑で鋭敏な覚醒状態へと向かわせる。

私は、これを曖昧模糊とした大望だと見なして放棄するべきユートピア的な理想だとは思わない。私は、世界が革命的な時代の始まり、歴史上の転換点に達したと信じている。それは、流血や叫び声によって、正義や人文主義、文明化された道義に基づくより平等な社会を生み出すべき時代であり、そうでなければ、過去に度々あったように、巻く力を失った歴史の時計が止まった時のように、人の生命は何世代も原始的なレベルで生き残り、粗野な野蛮状態に浸っている状態になり、殺人を厭わぬ闘争を長引かせて、やがて人類を絶滅させてしまうだろう。

そこで、我々が現代文明の偽の要素を取り除く仕事を引き受けるにせよ、未来社会を再建する仕事をするにせよ、創造的芸術家は、両方の仕事で重要な役割を果たす。そして、芸術家はその責任を逃れようとするいかなる試みも、芸術家があつての威力に対する背信であり、知的・精神的な死を受け入れることを意味するものである。とりわけ、それは個々の他人と共同生活するように生まれたが個人が犯す、平凡な人間性に対する背信であり、社会からの脱退、あらゆる人間関係の否定でもある。

## XI

このような様々な思考をした結果、私は幾つかの具体的な信念を持つようになった。それらは、一人の人間が光に向かって歩き始めたばかりの段階では、最終的と言うにはほど遠いものの、この時点で私が強調したかったヒューマニズム、特に一人のインド人として感じていた、不可触民、百姓、農奴、下級労働者、その他社会で抑圧されている人たちを、卑屈で無関心、絶望的な状態から、人間としての尊厳や自己意識をもつように引き上げるのを助ける必要性、という暫定的仮定に基づくものである。

上記の信条を、結論という形でまとめてみたい。

まず何よりも、私は人間、人類、全き人間を信じている。というのも、経験に照らしてみると、私自身が没頭している人間の必要と関心に対する探求心から人生への好奇心が湧き上がる

のを感じ、自分の研究からこの宇宙における中心的事実、世界を作り上げ破壊する存在、進化および適合への絶え間ない試みによって人生の叙情詩と雄大さを描き出す実在である、人間へと幾度となく回帰するからである。

人間——その短くはかない命が尽きた後もいろいろな残酷な物事の巨大な構造物が存在し続ける中で、人間は何とちっぽけで取るに足りない生き物に思えることか！ この貪欲な競争社会において、「逃げ遅れた奴は悪魔に食われろ」という日和見主義になる、なんと利己的で狭量な、卑劣で蔑むべき生き物なのだろう！ 最悪な例としてファシズム支配下では、人間は獣よりも獣じみており、同じ群れの弱い仲間を食物にし、嫉妬深く、悪意に満ち、相手が口を堅く閉じたクレーマ (Kramer) あるいは陰険な顔をした英領インドの警察官であろうとも他の人間を見下げることに一心で、動物的で、利己的で権力への欲望に満ち、鈍感で残酷である！

そうではあっても、人間の偉大な力は、全ての動物や物質寿命にも勝って、より優れた体制の下で、進化の過程の最高点へと自らを適応させる能力にある。人間は、その形状および動作において最も完成された美を体現するのみならず、大自然を評価する能力を体得したのである。人間は、関連する全ての微妙な要素を考慮しつつ物事の年齢を図り、太陽の重さを測定し、天体の特徴を確認することができる。人間は、自然を征服し、それを巨大な電気設備を使って自己の目的のために利用することができる。人間は、自らの最もはかない感情を記録し、絵画や石で物事の肖像を作ることができる。実際に、人間は自己と宇宙を完全に把握し、新たな価値を生み出し、その想像力、記憶、意志によって自らの最も高くかつ深い意識、およびいかなる過去の功績をも超越し、最新の生気に満ちた人生を得ることができるのである。

これほどまでに多様な特質を持つ生命体が存在するという奇跡だけでも、十分に驚嘆に値する。人類が、それまでに達成した頂点を超え、絶え間なく向上し、低次元の感性から華麗な高みへと自らを引き上げるのを見るとき、自らを苦境の深みへと沈ませるあらゆる有害な特質を有するにもかかわらず、我々は人間に希望をもつのである。この世界は、現状においては黒でも白でもなく主に灰色で構成されている。ただどちらかと言えば、明るい灰色というよりは暗い灰色である。そのバランスを回復するのは人間なのであって、善悪の宇宙を善の方向に傾けるためには、人間は、無関心と絶望のどん底に沈んだままではないのではなく、自尊心、つまり自分への信念および知識を向上する必要がある。恐らくバランスを探求する過程で、人間は、その豊かな知識によって、財産、所有、嫉妬心、権力といった阻害要因となっている本能や思考の悪循環を断ち切り、かつ新しい均衡状態を実現する新たな社会を発見できる程度まで、自己に対する意識を深めるであろう。しかし最初に、人間の役割についての新たな概念や、人間の本質的重要性を重視すること、人間への深遠な敬意、人間に対する愛、そして自らの背筋を伸ばし、星を見上げる度量への信念が、我々の間に発現されなければならない。

私は、人間の宇宙における役割についての私個人としてのこだわりの大部分は、ヨーロッパのヘレニズムに根ざしていることを意識している。なぜなら、この件に関するインドの伝統的態度というのは、基本的に非人間的、超人間的であるからだ。「このアートマン (Atman) <人の根源的本質>は、蟻と同じ、ブヨと同じ、象と同じ、これら三つの世界と同じ…、全宇宙と同じである」とブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド (Bṛhadaranyaka-Upanishad) <紀元前 1000 年>は説いている。

これに対して、私はこれまでの人生を通して、プロタゴラス(紀元前 500 年)の理想、つまり「人間は万物の尺度である」に心酔しているのである。たとえ、プラトンのソクラテス的対話にインダ的理想主義に通じるものを見つけた時でさえも、それを無視して、エウリピデス、ソポクレス、アイスキュロスおよびアリストパネスを好んで読んでいた。しかし、私がヨーロッパに借りがあるということは、アジアが受け入れたこの理想の美を無効にするわけではなく、それはヨーロッパが東洋の宗教、特にキリスト教を受け入れたときに、それらが墮落したわけではないと同様である。また、仏陀を念頭に置けばわかるように、ヒューマニズムはアジアにとって全く新しい概念でもない。近代の思想となると、ベンガル出身の詩人聖徒チャンディダース(Chandidas)の言葉を引用するに勝るものはないであろう。

「ああ、兄弟よ、聞いてくれ。  
人間は至高の真理である、  
人間より高尚なものはない…」

しかしながら私が好むヒューマニズムは、たとえばガンディーの神秘的ヒューマニズムのように神聖な是認に依存しているのではなく、人間の創造的な想像力、自己を変容させる能力、過酷な条件下でも自らの尊厳を大いに高め、世界を悲しみと痛みから取り戻すことのできる不断の精神的・身体的エネルギーを信じることにある。金持ちや権力者、秀でた才能の持ち主のみを称賛の対象とするような尊厳の間違った概念ゆえ、あるいはその人が優位とされる民族や宗教、皮膚の色に属しているゆえに価値があるのではなく、彼が人間であり、(たとえ現時点でどれほど墮落しているかにかかわらず)それゆえ既存社会構造の階層においてどれほど低い地位にあるとしても、創造的可能性を秘めているために、その人物は敬意に値するのである。

私は、人間の偉大さが、特に世界の歴史のこの時点において立ち往生しており、この逆境ゆえに、人類進歩の相対的緩慢さおよび自らと世界の歴史の把握における不確実性を考慮するならば、いかなる現実的観点からしても、世界のいかなる場所であれ社会の最下位層、弱者、落伍者、恵まれない人々に対して、敬意を持つ必要性をいま強調するべきであると信じている。なぜなら、我々の同情心の範囲を全ての人間に引き伸ばし、彼らを向上させることに注意を向けることによりのみ、排除された人々を、彼らが落ち込んでしまった迷信や貧困から救うことができるからである。しかし、慈悲や寛大さ、人道的大義は、人類から善良さが発現するのを妨げる悪や虚偽、愚行に対して、我々を盲目にさせてはいけぬ。さらに、個人的欲望を一括して人格とする間違った観念が、進歩する動物としての人間の概念を制限してもならない。

人間は本当に進歩するのか?と皮肉屋は問う。これに対する答えは、私がすでに例証したように、仮に人間が進歩する潜在能力のない動物であるならば、それが持つ美、真理、より高い道徳性、あるいはパンとワインへの欲望というものは、歴史を通じてこれほど頻繁にかつ一貫して明らかに表現されなかつただろうし、その動物は、肉食類人猿のレベルから高次元の生活へと発展もしなかつたであろうというものである。人間は、ベルサイユを怒号とともに崩壊させ、ロシア皇帝や満州族を権威から引きずり下ろしたのではないか。人間性が力を合わせてヒトラーを破壊し、ムッソリーニをヴェネツィア宮殿から追い出したのではないか。確かにこれまでの長い期間、あからさまな権力闘争や同様の欲望が、人間の持つ善への繊細な愛を凌駕し

てきた。あるいは、良き人間になろうとする欲求は、不誠実な聖職者、政治家、活動家の偽善的なフレーズに包み込まれてしまい、人類偉業の頂点へ到達するという動機は完全にそがれてしまった。

しかし私は、価値観の墮落は主に、自分たちの外側に存在する現実を把握したいという人間の願いに衣服を纏わせ、内に抱く大望を芸術という形で具現化するための神話がほころびてしまい、間抜けな預言者が、新たな知識に照らし合わせて価値観を再解釈する試みも全くせずに、古びた伝説、キャッチフレーズ、決まり文句を使い続けるときに、起きるものだと思っている。例えば、人間の相反する傾向を表現するのに、魂と肉体という古来の分類を適用し続けることほど、現代社会に多くの混乱を生じさせたものはない。なぜなら、精神的価値観対物質的価値観という単純化された開放的論考は、ヒトの人間性、全き人間としての感覚、多面的な人間性を曖昧にしてしまったからである。「内なる世界を解き放て！」と理想主義評論家は言う。「○○なんてくたばれ！」と無表情の唯物論者は言う。ここで両者とも、内面も外面も一つであり一人の人間の中で同一のものであること、精神は必ずしも物質よりも高位ではなく、これら二つは単に同じ現実の異なる様相であることを忘れている。今日、人間が全くの大混乱に沈められていて、綱の結び目を水面上に保つことができずとすれば、それは直面している根本的な人間としての危機、思考の腐敗、つまり大混乱から新たな秩序を生み出す制度を実現するためのアイデアと能力の欠如であって、人間性や勇気の喪失によるものではない。

私が思うに、暴力が何も正さないのと同様、我々がただ座り込んで瞑想にふけっけていても、この世界が矯正されることはない。世界にはいつでも、名状し難い自己陶醉、自己実現の歓喜を探求したり、あるいは取るに足らない満足を追求したりして、自分のことのみを考える人々が必ず存在する。また、暴力沙汰にも事欠かない。特に今日の世界では、そう言える。しかしながら、人間に対する平衡の取れた見方、理性、感情、想像力、そして事実に基づく知識を包含する見方——全き人間に関する見方——は往々にして欠如しているのである。

ヨーロッパおよびアジアにおいて、現世代と次世代は、我々の眼前に広がる混沌の時代にあつて過去の文化を守るために戦う必要があるだろう。そして我々が救済し得る文明と良識の寄せ集めを基盤にして、新たな文化を築く必要があるであろう。これは人間の全てのエネルギー、知能および献身を必要とする仕事である。ただ、機械時代の価値を見通し、真の技術とそれを模倣する疑似的アイデアを見分け、実をもみ殻からふるい分けられる分析的精神を持った新たな人間、全き人間のみがそれを遂行することができる。誠実で、私欲がなく、自由な人間、世界を住むことのできる場所として救える人間、人間的である人間、どこでも人間性を体現し、新たな生き方を探求する人間でなければならない。

恐らく、世界戦争の中でそうした人間はすでに出現しているのかもしれない。しかしここで彼らに求められているのは、知識を単なる知識ではなく意志となるようにし、自分が公言したことを実践することで他の人間の模範となるように、思想と行動を統合することである。

人間が他の人間や、あるいは自然の女神との重要な議論の論点にこのように目覚め、内なる衝動を劇的に表現して模範になれる正確な瞬間にこのように覚醒できるとするならば、それはほんの一握りの人々に限られる。創造的な芸術家は、経験の内的および外的な形を関連付ける記号や言葉を絶え間なく探求し、その思考は、頻繁かつ真摯に焦点を認識するようになるので、自らの仕事において他の誰よりも頻繁に思考と現実を統合させている。そして最高の芸術が、

芸術家自らが生み出す試作品によって多くの人間の欲求や渴望を表現するのと同様に、芸術家は、自分が作る神話の中に、最高の模範、全く私心のない真理、個人的真理を超えた真理を提示することになる。そうした模範の影響は、特定の芸術作品が時代遅れになり、戦争のような激変的出来事が繊細な真理を拭い去り、生命をぞんざいに扱い、潜在的な不均衡を助長する時まで、文明の均衡を保つことになる。次いで、かかる芸術家とそれに影響される人々の隔たりが広がっていく期間が訪れる。

恐らく現在の我々の時代は、そのような現象をどの時代よりも鮮明に実証しているようだ。山上の垂訓あるいはラスキンの『この最後の者にも』のような、必須の価値観を全世代に対して提示できるような書物は取り除かれた。その代わり我々は、死にかけた消極的な作家あるいは衰弱した人物が、自分たちへ注目を集めるために、大胆ではあるものの説得力に欠ける言動をするのを目にする。そして、自己崇拜、あるいはより意義深い事例において、自己実現が芸術家の理想となるにつれ、本人と彼の作品を鑑賞する人々との繋がりには完全に断ち切れ、少数と多数の間に全くの齟齬が生まれ、両者はお互いに対して何の影響を与えことなく存在するようになるのである。そして、この分断が作家の個性を台無しにし、自己のビジョンと技法上の問題の代償的称賛への信頼が崩壊する一方で、鑑賞者は見せかけ娯楽の混沌とした世界に逃避し、価値観を喪失するようになる。この段階では、死んだ世界は全ての意味を失い、単なる利口さが格言的知恵に取って代わる。かつて模範であった預言者は、見かけ倒しのペテン師となる。

私は、預言者あるいは模範としての詩人と他の人々の間にある分離は、解決されるべきであると信じている。その前に、詩人はまず自己の統合失調症を終わらせ、自分自身への信念を回復し、予言を行うための確信あるいは自信を取り戻さなければならない。なぜなら全ての基準の崩壊の前では、彼は繊細さという贅沢を賄えない。彼は、民族の良心、指導者、助言者としての使命を受け入れる必要があるのだ。

古代のヒンズー教徒が、百万人に対して宇宙のバランスを保つ一人の聖人がいる、と言った時、それは、ある個人によるこの種の思想と行動の統合、ある献身的人物によるこの種の認識によって、彼が他の人々に対して、人はどのようになれるのかを示すことができるということの意味している。

現代の複雑な世界においては、誰一人として新聞情報の蓄積なしに必要とされる完全性を達成することはできないかもしれない。そしてその輝かしい高みに達した時、実際には一般的な善人と悪人がもつ総ての品性の全くの裏側が顕在化されて、尊大な英雄や強者、有名人は、たいてい死んだ自分を礎にしたような幽霊、マダム・タッソー館の蝸人形のようなのである！

よって、生来の力と品位を豊かに持ち続ける不完全な人間のほうが、彼らの指導者たちよりも本来の人間性をより意識しやすいということが考えられる。しかし彼らの知識が活性化する前に、彼ら自身の力と活気に対する意識が生まれなければならない。なぜなら、蝸人形を見に来ている来館者のほうが、展示されている有名人の蝸人形よりはるかに生命力にあふれ、彼らは屈辱と傲慢の攻撃を被り、大げさな口調の独断的教義に面してもその肉体と血を枯渇させなかったからである。

したがって、模範となるよう努力し、自分自身が人間たりうるよう自問し、うわべ、そして他人から押し付けられてきた虚偽の価値観や詐欺まがいの約束を捨て去る責任は、全ての人間

に課せられている。この種の覚醒が大勢の人々に起きるならば、人間性は、埋まっていた泥沼から抜け出し、全く新たな生命へと、今の死んだあるいは死にゆく我々の世界を生み出した復興よりはるかに大きなルネッサンスへと発展することができる。

よって私は、人生の新たな状況を実現するための第一前提は、必ずしも特別な個人としてではなく、一人の人間として人に敬意を持つことであり、その人を生き生きとした活動的で大切な人間、献身的で誠実、個性的でもあり没個性的でもある人間、一つの模範的人間にする全ての特質を鼓舞することを、繰り返して強調する。

なぜなら、より真実性があり適正であると私が信奉する見方は、人間を、変化できない救い難い生き物と見なすのではなく、物事の変化において限界はあるものの未だ半分しか覚醒していない存在として捉えるが、彼が生来の活力、精神力によって自分自身と世界を素早く変容させ、開花するのを阻害する圧政的暴君をこの世から取り除くことを期待するものだからだ。それができれば、人間は過去の遺産および現在入手可能な知識の宝庫からすべて価値のあるものを集め、内面に深く根ざした葛藤の根底に到達し、自分を他の人間および全ての抑圧されてきた人間の可能性と結びつけ、泥沼と湿地から抜け出して世界の街道と航空路へ到り、獣の勇気を持つ愚かな傭兵ではなく崇高で啓発された英雄として這い上がってくるだろう。

そうなることによつてのみ、来世よりも現世の価値観が重視され、ここに今ある価値観がこの後には絶対に到来しない来世の価値観よりも強調されるようになり、他の人間との関係において進化する価値観が、今では無意味となった過剰な宗教や権力政治よりも優先されて、人生は生きる価値があるようになる。人間とそれが持つ想像と洞察の力を再主張することにより、教会と神父によつて巧妙に曖昧にされ、より暗くされてきた暗闇の謎から人間とそれが住む宇宙へと焦点を移すことによつてのみ、生きるに値する新たな人生が明らかにされるのである。

私は勿論、人生は生きるに値するものであり、身体的であれ精神的であれいかなる種類の自殺も、人間社会の疾患や挫折から生じた誤った概念であり、生きることへの願いは生物学的に自然で効率的であり、生きることの大局的目的はさらに多くの、高次の、意義深くより良い人生を生み出すことであることを当然だと思ってきた。人の一生は短いがゆえに、命は人間にとって最も価値ある所有物、最も神聖なもの、無駄にすべきではない贈り物であつて、そのために、人とそれが住む世界の完成は最高の価値を持つのである。その完成は、人間がなし得る最大の業績であり、その一生の終わりに自分に対して、新たな世界の偉大な哲学者として、「私は、自分の人生全てと自分の全ての力を、人類の解放という、世界において最も崇高な大義に与えた」と言えることである。

もしこの人生が生きる価値のあるものであれば、ではそれをより実りあるものとするために、人には実際に何ができるのであろう？ 明らかなこととして、自分の周りを見回し、世界を包み込んできた闇を見つめ、自問することである。なぜ文明化された人間の命が戦争に侵害されているのか？ なぜ組織された社会の人生が、平和を愛し勤勉な人たちの間で荒れ狂う、ある種の洗練された暴力団主義へと墮落してしまったのか？ なぜ世界はこの野蛮な時代に突入したのか？ いつまでこれが続くのか？ そしてこれはどこへ行き着くのか？ 我々はどこへ漂流しているのか？

戦争という文明の危機は、他の何よりもはるかに人々に自問させるものである。最も進歩が遅く、まず考えることがない人々を含め全ての人間を、決まった型から出るよう揺さぶり動揺

させる。そして、それによって経験する苦しみと困難が、そのような疑問をより深刻なものとし、大衆の意見をより人道、真理、公正へと傾かせることとなる。

もちろん、この社会の古臭く死につつある体制は、自分たちの古いワインを新しいボトルに詰め替え、陳腐な標語とスローガンを新たに吹聴し、騒々しい音の空虚だが勇ましい展望を大げさな様式で表現し、うまく行くだらうと期待する。

例えば、新バラモン派 (Neo-Brahmin) の、ジェラルド・ハード (Gerald Heard) はこう言っている。「現代人は無意識を代償に意識を発達させてしまったため、通行証を売り渡してしまったかのようだ。意識の結果である物質主義、個人主義、民主主義が発展した後の、この全ての渴望を見てみればいい。精神性と『忠誠心』が世界からいかにして消え去ってしまったかを！ この世界から、それが抱える問題、失敗、不確実性を取り除くとして我々が望んでいるのは、新たなカースト制度を作り上げることだ。最高階層に、黙考、放棄、禁欲主義、秘伝の修行によって無意識のうちに展望、直観、天啓を獲得し、政治家が治めるのを助ける、私欲のない何人かのパンディット (Pandits、インドの学者、賢者) あるいはヨガ行者 (Yogi) を据え置こう。二番目の階層は、理性を主たる武器とする中流階級の専門家、技術者、管理者、芸術家であろう。最低階層は、性交、労働、従順を主な役割とする、大勢の労働者集団である。ヒトラーのファシズム共和国の『統合された民主主義』やインド復興論者が唱える黄金時代のようにではないというわけではない！ 結局のところ、その制度はヒトラーの新体制のためにローゼンバークが描いた青写真とどこが違うというのだ？」

もちろんハード氏は、自己陶醉と不可思議な儀式に一時期間関わっていたので、より劇的な話し方の中毒になっているわけだが、他にもこの時代の苦境のせいで精神に異常をきたして、古来の神話や様々な迷信に安らぎを求めている人たちがいる。

こうした傾向の全ては、逃避であり半端な真理である。しかも実際のところ、それらは人々が考えていることと益々かみ合わなくなっている。なぜなら今日ほど、歴史の事実として原因と結果の作用が劇的に例証されている時代はないからである。しかも今日ほど、人々がこれほど真剣かつ不安のうちに自分たちの周囲で起きていることを理解しようと努め、昨今の行き詰まりからの出口を見つけようとしている時代もない。そして新たな価値観が、人々から提起される絶望的だが具体的な論点に基づいて生まれつつある。それ故、人々は雄弁家のいかさまと策略を見分けるのが早くなっている。私は、こうした新たな価値観が、我々の目の前に広がる困難な時代を通して、強まっていくと考えている。

しかし具体的に言って、これらの新たな価値観とは何なのか？ そして文明はそれにどう影響されるのか？

私が思うに、我々の文明の主要な危機は、全ての世代に周期的に起こるように思えつつ不健全な、新たでより良い戦争への要求にある。いまや「人間あるところに常に戦争がある」ということは真実ではないと思える。人間は生来、善でも悪でもないのだ。人が善となるか悪となるかは大方、人間を進化させる制度にかかっている、あるいは J.B.S. ホールデン教授が言うように、人の徳性と悪性は技術的發展に大きく依存している。そしてこれは歴史が例証している。太古の原始的社会では、ある特定のグループの中であって全ての人々は兄弟であったが、自分たちが恩義を感じない他の社会や部族の成員を殺害することは、ほとんど躊躇されなかった。労働の分業と物資の取引が進展すると、社会はどんどん大きくなり、小さな社会は解体され、

封建制度および農奴制が発達した。現時点では、科学の進歩は、制限のない資本主義よりも社会主義のほうがより良い制度であることを示唆しているようである。

しかしほとんどの人たちの考えには逆説が生じる。我々は、社会主義がもたらす管理統制および一律性を大いに利用する一方で、精神的自由を保つことができるだろうか？

私は、最も深遠な社会主義が最も深みのある人格を完成する唯一の基盤であり、双方は相互に包含され、両者を結合することによってのみ、より豊かで安定性のある文明を興すことができるかと信じている。

生産活動の主要な手段、基盤産業、鉄道、鉱山などを国家が管理することが、独占、カルテル、大規模な失業、それに伴う挫折、それに続く流血の海を引き起こす鍋を削る経済の混沌を終わらせる唯一の方法である。一方で、完全雇用は、利潤ではなく必要のための生産によってのみ保証できる。この自明の理を反駁できる者はまずいない。

この第一の公理の必然的結論として、社会主義のみが、全ての人間の尊厳と真の自由を回復できる。なぜならそれは経済的自由を約束し、政治的および文化的自由、つまり真の民主主義のために人々が戦えるようにするからである。

しかし我々全ては、この移行過程を実施するにあたり、私が文明の特質と呼びたい、精神的そして人間的な価値が、人の性格の限界を認めることによって犠牲にはならないよう見届ける義務を負っている。

私としては、この試みはケーキを食べて持つことのように思える。これを否定はしない。しかし私にとって、社会的公正への情熱は、生きることの詩歌と同じほど現実的である。そして私は、両者が我々の渴望する、全き人間の一部分であると主張する。

私は、我々が、広範囲で寛大かつ洗練された文明秩序を発展させられないのは、大いに感情に満ちた生活の抑圧、旧体制により課されてきた下らない束縛の遺物のせいである、と断言する。同様に、我々の行き過ぎた堅苦しさ、頭を使いたいじめ、無神経にも理性を重要視する態度が、廃止したいと願っている非常に陰鬱な封建的習慣および衝動を破壊する過程において、往々にして我々自身をも破壊するのである。よって必要なのは、情熱に動かされ、愛から生まれ、知識に育まれた、大きくて理解のある寛大で賢い心なのである。

我々が最も深遠な社会主義や人間性のために闘っている間に、もう一つ忘れてはならないことは、この奮闘こそ新しい問題や矛盾、ひいては新たな社会を願望する人々の創造的ビジョンによって満たす必要のある空虚さをも生み出すということである。特に重要なものは、生活の質を形成する、これらの微妙で扱いにくい実体、理念と感情、それぞれの間の対立である。そのため、それらを十分かつ明らかに、何の拘束もなく把握するため、知的自由を守る特別な配慮が必要である。この点に関しては、少な過ぎる自由よりは過度な自由を与えるほうがよい。というのも、芸術、哲学、自然科学の作品の創造に必要な環境は、他の種類の作品に必要な状況とは大いに異なるからである。実際に、進歩主義、保守主義、偏見、勇気、恐怖の合成物は、ほとんどの知識人の内面にあって、明晰かつ知的な思考に必須の前提条件である。これに関しては、批評家デズモンド・マッカーシー (Desmond McCarthy) の「自由を愛する者はライセンスなど気にしない」というスローガンが当を得ている。芸術については、その手段だけで結果を評価しても十分ではなく、むしろ聖書の「その果実によって彼らを見分けなさい」という文言が適用できるからである (マタイ伝第7章20節)。

新たに豊かな、多様で、複雑な、繊細で、公正な社会が生まれるとしても、政治的道具としての戦争は、それ自体が旧社会の混沌と欲求不満から出現したものであり、将来の抑圧や自殺行為の種を孕んでいるので、消滅しなければならないということを、私は繰り返して言う。しかし、新たな社会主義社会だけが戦争を終わらせることができるという矛盾が、私たちの前に立ちだかる。そしてそれはまだ先のことである。さらに、それを実現させるための代償がどれほど大きいかは、ほとんどの人々は認識していないのである。

現時点において具体的に人々がすべきことは、我々が既に慣れてしまった広範囲に亘る流血行為を避けるために、自分たち各々の政府に、平和的な政策を建設的な社会改革の方策と共に、強制して実行させることである。

しかし私は、どのようにすればこの種の前向きな計画を実行できるのかは、誰もはっきり分かっていないことに気付いている。それは、次世代の若者の花をむしり取ってしまうことを意味するのだろうか。あるいは我々は、蘇生した帝国主義が即決裁判後に我々を一人ずつ断頭台に置くまで、収容所で退屈に欠伸をしながら座っていなくてはならないのか。

あるいは、人類が大地を一掃して、トウモロコシの穂すべてを自分たちのものにするだろうか！ 誰にも分からない。

というのも、この時代の急転換や驚異、それらにみなぎる矛盾は全て単純化されることを待ち望んでいるからである。より大多数の人々が、慌ただしい速度で起きる出来事によって革命的な状況に直面する前に、啓蒙され強化されるかどうかは、未来が語るであろう。しかし、現代社会の混沌と戸惑いが、一大転覆によってしか解決されないことは確実である。

とはいえ私は、これらの革命が一つのユートピアを生み出すとか、あるいは何らかの絶対的価値を普及させるなどと考えるほど天真爛漫ではない。なぜなら、革命は新たな人生を希求し、かつ大きな変化をもたらすにもかかわらず、常に解決すべき過去の遺物をそのまま持ち込むからである。革命はただ、悪循環を打破し、旧体制の分裂を修復し、新たな生活のパターンを示し、あちこち押しついたり突いたりしながら、人々を別の時代へと進ませるのである。

いかなる単一の努力も、歴史上のあらゆる闘争を廃止することはできないだろう。革命は、人々に人間の進歩の不確実性を意識させ、新たな奮闘へと駆り立てる。

例えば、資本主義を廃止して全く公正かつ平和な社会を一気に築こうとして社会主義を悪用する人々は、自らの知性を侮辱している。なぜなら彼らは、もっともらしい合理的な考えだけで、人々に古い秩序との絆を断ち切らせることができると仮定しているからである。人間の歴史全体を見ても、この種のユートピア主義を立証するものは何もない。人間関係というものはいくつもの異なるレベルでの闘争の発端となり、社会公正のための最も完璧な制度や最も平等主義的な社会構造へと導く路上には、とげがまき散らされているからである。

人生の最上の価値はむしろ、物事全体の一部分として生きようと試みることにあり、人々を覚醒させることと物事の緊急性との時差に取り組み、それを短縮することへの奮闘を意識し、絶え間なく努力することにある。よってあらゆる道義的価値は、革命的価値、革命的人生の価値となる。そしてこの意味において、革命は、連帯感への要求、人々が他人と協働して社会の道義的・社会的悪弊を解決する試みとして理解することができる——それは人々の間に兄弟愛を、黒人のロビンソンの手を握ることができなかった時代に対抗する優しさを要求するものである。

このエッセイを通して私が強調している創造的芸術家の役割について、インスピレーション

があろうがなかろうが自意識の強い少数の人間だけが社会の悪弊を解決できるというのが私の意見だ、と解釈されるべきではない。全ての人が高位の創造的芸術家であり得るわけではない。我々が新たな生活様式の問題に直面する限り、我々の社会の危機はあらゆる人間に影響を与える。私はただ、作家の立ち位置をできるだけ分析しようとしてきただけだ。なぜなら作家は、私が今日必要であると信じる種類の創造的行動において良き手本を示すからである。そして、総ての人間は芸術家により表現される創造的能力を潜在的に有しているので、ここでの課題は、いかに個人が押しつけられた抑圧や欲求不満を脱し、社会の中で健全で生き生きした活力のある人間として自己実現できるかどうかである。

私がここまで述べたことから、どんな単一の人的活動機関も、たとえそれがいかに巧みに組織化されていようと、人間の創造的能力を実現させ、それを社会において実践できないことは明らかだ。教会も他の正統宗教もそれはできない。なぜなら、私が既に示唆したように、それらの信仰は究極的には、神秘的体験や神との合体に基づいていて、そうした経験は世界の歴史の中では少数の人間にしか授けられなかったように思えるからである。またそれらの教義は、各々が成功への王道であると主張しており、あまりにも多様で矛盾に満ちている。さらに自然科学も芸術も、それだけでは新たな人生の扉を開く「開けゴマ」の呪文にはなり得ない。そうだ、私は人間の価値観を考慮に入れた多面的なアプローチこそが、新たな社会の中で人々を真の尊厳へと引き上げてくれると信じている。

私が擁護しなくてはならない多面的アプローチという考えには、ある種の曖昧さがある。私は、それが単なる教養ある人々の気楽な態度だけではなく、あらゆる人々に共通する一つの態度であり、たとえ顕著ではなくとも日常の経験からして十分に具体性のあるものだと言おうとしている。私は、広範囲におよぶ包括的・集約的原理に世界を適合する形而上学的統一を定義するためのあらゆる試みは、疑わしいままであると十分に自覚している。しかし私がここで教義として提案したいのは、様々な形を取る、生きた脈打つ感情として誰もがよく知っているものであって、それ自体が幸福の基盤になり得るものである。

この原理とは何だろうか。

私は、特に劇的なものは思いつかない。それは別段不思議で新しいものではないが、それは我々の人生の最も基盤となる一つの事実、我々を友だちや親族、自分がしたい本物の仕事と結びつけるもの、あらゆる人間生活の根源であり創造性に富む中心である、ある種の優しさや愛に他ならない。自然主義的な次元で最も探求されている感情、愛は、家庭では金銭的要素により損なわれ、我々の文明の安っぽい商業主義的技術で卑屈な感傷へと貶められている。学者や自然科学者が利潤を追求する仕事をする時、そのほとんどは、知識求道者の背後にある至高な価値観にインスピレーションを受けたとは主張しないだろう。詩を、エリートのための贅沢に貶め、ブルジョアによってボヘミアに追放されたかボアの丘に登らされた人々の産物だとする社会にあっては、自然や人間を観察する詩人の意気揚々としたビジョンの中心を自分の天職だというほど天真爛漫な詩人も稀である。人間のあらゆる行動と努力の背後にある支配的衝動は、かなり自意識過剰なタイプの人間の進化によって抑圧・妨害されている。愛のみが、あるいは愛の欠如が、あらゆる人間交流における共通的特色であって——陳腐な表現を使えば、とはいえ実際にはそれほど陳腐に聞こえないが、愛が字義的かつ比喩的に、真に「世界を動かしている」のである。

私は、世界の多種多様な総ての民族が、互いへの優しさに鼓舞されて、様々な国籍の人々や民族からなる新しい民主主義共同体を構築しようと集結することによってのみ、新たな社会が生まれると考える。そういった地域集団から、自分たちの文化や言語を維持しながら、自由な物々交換や商取引によって諸民族の経済的・社会的必要を調整する余裕のある、より大きな集団や連邦が出現する可能性もあるだろう。

私は、「最善の人間による支配」あるいは「管理者」などによる貴族的な民主主義の類いは、本来の民主主義を意味しないと主張する。人々の精神的・物質的な欲求が十分にその役割を果たせる生活様式が民主主義だと言いたい。民主主義はこの点において、人間の尊厳を認めて守ることを保証し、自らの生活を政治的にコントロールし、自らの経済的・精神的自由を確実にする一つの方法となる。

明らかにそのような民主主義は、自由放任主義に基づいた現在の社会秩序を覆さなくては実現できない。それは、古い社会の悪循環と決別することによってのみ達成される。なぜなら、私が既に主張したように、訓練された人材による政府や騙されやすい選挙民に選出された専門家によって運営される現代西洋の民主主義については、それが機能しているというのは、全く真実ではないからである。私は、そのような民主主義の中で最高の統率権を發揮すべき人々は、実際には、そうした立場で自分たちの意志を実行する権限をほとんど持っていないと示唆してきた。成長や改革、自由な生活の発展の機会、権力や富、特権を愛するごく少数一族の利益にかなうように施行される規制によってことごとく妨害されている。

これらの人々の中には、人間の中に新たな民主主義に対する覚醒が起きることを脅威とみなす者もいる。そのため彼らは、盛んに感嘆符を盛り込んだ戯画の新作を使って、一切合切を却下する。彼らによれば、新たな民主主義の基本原則というものは、「総ての人間は平等であり」、「あらゆる人が望むものに投票すべきであり」、「大多数が投票したものが正しい」ということなのだ！「もし彼らが酒やタバコ、犬を教育や自由よりも望むならば、もし彼らが出世の女神を他の女神たちの前に置きたいならば、そう、それは人々の意思であり、どうしようもないのだ！」人々の大望を軽蔑した上で彼らは提案する。平凡な市民はそもそも自分たちが扱うことのできない公的課題に絶え間なく取り組んでいる時間はないので、私事だけに専念していればよく、一方で政治については、その種の仕事が好きで民主主義を運営するのに長けた人々の手に委ねるほうがよい。そして彼らは、自分たちの生活のやり繰りに忙しくて政治に口出ししないような大衆を理想的な有権者として見なし、そうして自分たちの非道な政策を実行し効率的に権力を行使しようとする。民衆側のいかなる苦難も犠牲も、彼らに平凡な人々の観点に立った自由の価値を確信させることは全くないようだ。

しかし、「貴族的な」民主主義の概念は、人々から選ばれた代表による腐敗した権力の行使の例をあまりにも多く見かけるこの革新の時代にあっては、時代遅れとなった。そして到る所で、民主主義のために戦う人々は、自分や周囲の人たちの道徳的・物質的要求を満たす最善の組織を設立しようと決意している。

この点において、西ヨーロッパの旧式な生活様式から決別したロシア革命の教訓は際立っている。それは利潤追求主義を一挙に打倒したばかりではなく、人々の間に基本的な地域意識と職業上の連帯感を関連付ける方法を見い出した。それは、自己決定権と相互の文化・経済的交流に基づく良い隣人関係を、様々な国家間に築き得る技法を作り上げ、とりわけ「帝国主義的

民主主義」に支配された人々にとっては実証例となった。利己主義の哲学は、今日に至るまでの25年足らずで、書き言葉や一千以上の語彙を持たないアジアやシベリアの極めて後進的な人々を解放し、新たな同胞意識に基づいた新たな人生の表現、重要な文学や芸術を作り上げた時代にとって代わられた。ロシア革命が、潜在的にキリスト教が生まれた時の山上の垂訓と同じくらい文明の歴史に重要な影響を及ぼす、とラスキー（Laski）教授が考えたのも当然である。

私も既に述べたように、西洋社会とその価値の瓦解や分裂に直面して、世界が欲深い生活形態から社会主義的経済組織へ推移しなければならないことを殆どの人が否定できないのは真実である。しかし多くの人々は、そうした社会主義社会が文明の価値基準や信仰を提供できるという主張に対しては難癖をつける。

私は、社会主義を単なる社会の経済的組織として捉えるのは、狭量な偏見だと確信している。私は、社会主義がそれ自体の内部監視機能や価値基準、理念を進化させる精神的变化を伴っている事実を強調する。これら新しい基準や価値観は、非常に多くの実験が行われた後でしか進化しないだろう。また、私は無能で無慈悲な官僚主義の危険性を意識していないわけではない。私がおつきりさせたいのは、社会主義を発展させるのに適した外的環境がなければ、大多数の人々にとってそれを十分に内的に充実させることは、不可能ではないにせよ困難であるということである。我々の時代の思想家が人々の経済的関係を強調しているというだけで、人間的な関係の可能性は彼らが創造する社会とは全く無関係であるとは言えない。人生とは、パンとバターの問題以外を総て排除するには、あまりに豊か過ぎて絶妙で、包括的な活動である。ただ、もし新たな文明が生まれるとすれば、経済関係を劇的に変化させる蘇生力が、基本的な前提条件の一つである。

したがって、私が強調する新しい共同体感覚の必要性、新たな生活様式を実現しようと奮闘する人々の集結というものは、日曜日だけ教会で兄弟愛や友情を誓い、他の曜日にはビジネスのために他者と熾烈に攻撃しあう人々が感傷的に集まることを意味しているわけではない。個人的利益のために動いている社会を信頼する人々の間、金融業に携わる同業者の間、あるいは実業家と彼らが搾取する犠牲者との間には、真の意味で実現できる善意はあり得ない。そして彼らの利害が衝突する環境では、いかなる打開策も新たな社会を生むことはなく、意識改革のための真の奮闘を単に延期するだけだろう。実際に私は、真の民主主義に基づく社会のことを心から考えている人々は、新たな生活様式を妨げるあらゆる圧力を理性的に批判できるよう自己と他者を教育しなくてはならないと確信している。

私は、進歩に至る真っ直ぐな道はないと十分に認識しているので、これら基本的な条件以上のものは要求しない。ある共同体の中で個々の人々が集結できるかどうかは、自分たちと自分たちを取り巻く世界を人々に深く認識させる多くの要素に依存するし、より詳細な計画を描けるかということよりも、純粋なる責任感のほうがかはるかに重要である。その情熱や理念は、投票用紙を箱の中に投げ込んでさっさと帰宅してぐっすり眠りたいという欲求によって抑制され押さえつけられるものではない。

この啓蒙化の実現は単に望むだけでは十分ではなく、人々が自らを解放するため、長い眠りから覚醒し、新しい時代へと生まれ変わるため奮闘することによってのみ獲得されるものである。というのも、有産階級が押しつけた社会の教育・文化生活に対する政治的・道徳的な抑止管理、および自分たちのプロパガンダ推進のためのその意図的な悪用行為は、単に願ってな

くなるものではなく、組織的方法で立ち向かうべき問題である。新たな人生の信念を実行するためには、人々の気質が全体的に一致しなくてはならない。しかしやはり、ウェルズ(H.G. Wells)の『誰でも参加できる陰謀』だけでは、望まれる変化は起きないだろう。

私は、新たな人生を実現する集団的行動のためには、皮膚の色にかかわらず、搾取されている者や騙されている者、略奪されている者が、そして社会の中でそれらと関係する者たちが結束することが重要であると信じている。現在、社会は異なる主権国家体制で組織されているので、たとえごく小さな計画であっても、広範囲に一致した集団を丸丸として集結させることが全くできない。なぜなら、様々な国の不均一な社会的、精神的、政治的發展は各々の地方の目的に合うように調整されているからである。また、新たな生活様式の恩恵に預れそうな才能に恵まれた多くの人々は、達成するために払わなくてはならない代償を恐れているか、あるいは平等主義社会への変化を疎むことに慣れ過ぎている。その結果、大多数の人々に唯一共通するのは幸福への欲求であり続け、それは人間の個人的関係や愛、優しさへの欲求の一つの形態に過ぎない。しかし旧社会の矛盾に付きものの対立関係が、新たな人生への変化を後押しする力を推進する一方で、(そして最もやる気のない、現状に満足している人々でさえ、距離を置きながらもそれに関心を持つ一方で、)私は、様々な国にいる啓蒙された人々の一致と結束、共通の目的という最小基礎の土台の上に立つボランティア組織、および広範囲に共通する哲学だけが、我々の時代において新しい生活様式を達成したり、あるいはその準備ができたかすると信じている。

私は、この優しさを試みることによってのみ、新しい生活の原動力、新たなヒューマニズムが生み出されると確信している。なぜならその試みは人間の尊厳を、彼らが長年経験してきた損傷や挫折感から、個々と集団の能力が最大限発揮される高みまで上り詰めたという衝動を人々に、認識させるからである。というのも、もし幸福が最大の善であるならその実現は、人間とは何かという問いかけや、社会を改善する中での他者に対する自らの責任の認識、人生をより貴重なものとし、活性化し、より情熱的なものとする、心に魂を込めること、天才が真実を明らかにする電光の閃きを認識することに依存するからである。

そしてこれが新たな異なる生活様式をもたらすことになる。これによって、個々の人々はお互いの義務を確認する。これは、何かしら抽象的な神やシンボルにではなく、他の人間や彼らの生命の炎に奉仕し貢献する観念を生み出すものである。

これにより、聖職者を養ったり教会や寺に寄付をしたりすることで天国に居場所を確保したいとの思いから生まれる利己主義の類いは、最も多く報いられるものは他人のために自らを犠牲にする行為や、自身がより豊かに新しく、健全になることを見い出すために滅私奉公する行為であると考え、無私の精神に取って代わるだろう。

そうだとすれば、二つの異なる道德律があることになる。数人の選択に基づく旧秩序の道德律と、今は低い底辺に沈む不潔でむさ苦しく無知な人々に委ねられてはいるが、囲い込まれた生き地獄の中から将来の民主主義の指導者として、過去の継承者そして将来の善悪の新たな意味の創造者としての役割の認識へと立ち上がることができる、人間らしい道德律である。

私は、この人間らしい道德律は、死にかけた世界の偏狭で独断的な規範の影を薄くすると確信している。それは、部族間の憎しみ、恐怖、罪の意識、不幸を喜ぶといった、多くの原始的性向を除き去る可能性がある。苦痛に抵抗する気持ちがなければ進化するしないので、苦痛は決し

てなくならないということもあり得る。しかし、例えば医学研究や自然科学による無益な苦痛の根絶というものは、不必要な苦痛はなくなり得ることを明らかにしている。それにしても、邪悪さというのは、砕くにはあまりに固い殻である。なぜなら、進化には邪悪さが付きものであり、度々それから善が生まれ、その存在を打倒するような世界を予想することは困難であるからである。しかし我々は、合理的な人間としての進歩を達成する時、不必要な残酷さや苦痛、恐怖、憎悪をより積極的に、確実に制御できるだろう。

私は、ひとたび基本的事実、根本的なものがいくらかでも解決されるならば、我々を弱々しい揺籃期からより優雅な価値のある自我を持つ存在へと前進させる文化的発展期間が、人間の歴史の中にもたらされるだろうと確信している。自然科学、産業技術、心理学によって明らかにされた事実が、これまでの価値観が不適切であることを顕わにし、既に旧世界の大部分の道徳は放棄されている。しかし進歩は頭だけではなく、心の発達によっても測られるゆえ、自然科学的な人文主義では十分ではない。とはいえ、理性は、人の感情と潜在意識の衝動にかかわる分析が急速に進行中で、無知に対する奮闘が激化しているという事実から希望を得ることができる。しかし美德は、それだけで喜びとなり得るもので、目に見える結果や、自己や他者の観点からよく映る名誉勲章を期待する必要はない。また創造的仕事や他人への奉仕は、唯一の陶醉である。なぜなら、その中に、そしてそれらを通して、人生が維持されるばかりではなく、真の幸福や次世代への遺産となる文明の全体的進展が達成されるからである。

私は、人間の行為に関わるこれら新たな原理は、人間に対する偏った見解から、これまで培われた知識全体が明らかにした全き人間・人間自身へと重点をシフトしている事実によって明白となっていると考える。また、人々が既にそれに気づき始めており、今すぐではないにしてもある時突然、自らの人間性の意味を認識するために奮闘するであろうことを確信している。

私は、人間というものを信じている。

## 追記

原子爆弾の発見によって、私はこの小冊子に何かしら付記する必要にかられた。なぜなら、新たな時代へのこのような衝撃的な突入は、私が先行する頁に述べてきた、人間と宇宙における人類の場所についての結論の大部分を無効にするように思えるからである。しかし、私はナサニエル・ホーソンが書いたある物語の次の一節に出くわした。それが、私たちが生きるこの時代についての私の姿勢を全体的に要約していると感じる。

『『いやいや、君たち』と色黒の人物が言った。『みんな、そんなにがっかりするなよ、君たちには、これからまだ良い時がくるよ。知ったかぶりをしたこいつらが火の中へ投げ込むのを忘れたものが一つあるよ。それを燃やさなくては、他のもの総てを火にくべても全く無駄だよ。そうだ、地球自体を灰にしてしまったにもかかわらず。』』

『『じゃあ、それは一体、何だって言うんだよ？』と最後の殺人者は、答えをせがんだ。』

『『人間の心、それ以外にないだろう？』と色黒の顔をした見知らぬ人物は、不吉な笑みを浮かべながら答えた。』

